

台詞の余情と融合文化

Suggestiveness of Dialogue and Coalescence of Culture

片桐 睦人

KATAGIRI Mutsuto

Abstract: The beauty of *yugen*, which values suggestiveness, is a beauty that takes shape where only a few words awaken many thoughts. Therefore, it can be called an aesthetic world, made possible only in a community in which people communicate through cultural sharing. The *Ma* of dialogue means an interval in time or space, but it is not simply a blank. In theater, it is realized by a posture of stillness inserted in spoken lines or between actions to impart a subtle suggestiveness. Thus nothingness lend a considerable effect to the movement and expression of the whole. The sense of coalescence of culture is one of the unique charms of this dialogue.

Keywords: dialogue, *yugen*, *ma*, suggestiveness, coalescence of culture

台詞の間と情緒、日本文学と英詩の融合

1. はじめに

余情を大事にする幽玄の美は少しのことばで多くのことを考えることが可能にする美である。従ってすべてを言わずとも相手に通じる、同質の文化を融合する共同体の中でこそ可能となった美の世界にあるともいえるであろう。

台詞の間とは時間的休止あるいは空間的な空白を意味するが、単なる空白ではない。演劇では余韻を残すために台詞や動作の間におく不動の姿勢となる。

何も無い無が全体の動きや表情に大きな影響を与える。

この台詞の余情そして融合文化について考察する。

2. 台詞における「 」の意味と余情

1982年にNHKで放送された山田太一著『ながらえば』の一場面を取り上げて台詞の「 」の意味について考察したい。

笠智衆演じる岡崎隆吉は、病氣入院の妻の岡崎もとを名古屋に残して息子夫婦の転勤で富山に引っ越すが、妻逢いたさに、お金もないのに列車に乗って名古屋の病院に向かう。病室を開けて寝ている妻と対面する場面である。

個室

隆吉「 」もと「 (眠っている)」隆吉「(ゆっくり近づく)」もと「 」

隆吉「(もとを見つめる)」もと「 」隆吉「(妻への愛が溢れ、手をのぼし、ちょっとためらったのち、妻の頬に掌を触れる)」もと「 (眠っている)」

隆吉「(もとの額にキスしようと、ゆっくり身体をかがめる)」もと「気配で目をあく」

隆吉「(慌てて身体を起こし、咳払いをしながら、窓の方を向く)」もと「(その隆吉の後姿を見て)大変でしたなも(力なくいう)」隆吉「なにが？」もと「なにがて

行ったばかりにまたすぐ名古屋へ」隆吉「んにゃあ おそくなってしまった」

もと「いいえ」隆吉「もう、ええか？」もと「ええ。もう、大分ええです。」

隆吉「ほうか うむ(他にいう事がない)」もと「(その隆吉の後姿を見る)」

隆吉「うむ。ほうか。」もと「よう、よう、来とくれました(淡々という)」

隆吉「ああ しかし、富山は、遠いわ(とはるばる来た思いが溢れる)」もと「ねえ」

隆吉「わしは いやだ、名古屋におりたい」もと「我儘いって」

隆吉「名古屋に おりたい」もと「そんな事いっても、悦子ンとこはゴタゴタしとるし、狭いし、おるとこあらせんがなも」隆吉「 」もと「なおったら、すぐ行きますて」隆吉「なおらんなら、どうする？」もと「 」

隆吉「これでもう、二度と、逢えんかもしれんでないか」もと「病人に、よくいうわ(と静かに苦笑)」隆吉「いたい、わしは、お前と、おりたい、おりたい」もと「 」

隆吉「(少年のように涙ぐみ、それを手で拭く)」もと「(涙ぐんでいる)」

隆吉「(涙更にふく)」もと「(涙)」隆吉「 」もと「 」

3千円程度のお金を持って、列車に飛び乗り途中下車させられて、降りた駅の近くの旅

館で一泊するのだが、そこで老婦人の死に出会い、残された夫の悲しみに触れる。

お金がなくて、自分の身の上を話すと老人は快くお金を貸してくれる。

そんな布石があつての病室の場面である。

病人の方が、口数が多い。この何度も登場する「 」に余情を感じ、泣かされる。

感情をことばにしない、この何ともいえない無言の間の美しさに黙して語らない城といった凜とした風情がある。これが余情である。

美辞麗句を連ねた台詞、歯の浮くような台詞に胸を打つ事はできない。

3. 能の幽玄性について

振り返ってみると能を初めて見たのは、2003年47歳の時である。能を見たいという強い気持ちではなく、「静岡春の芸術祭」の一プログラムであつたからのみの動機であつた。「能」を勉強することになって、能の歴史から振り返るということに出会つた。

2003年5月16日(金)静岡舞台芸術公園 野外劇場「有度」にて19:30開始、シテ 観世榮夫「景清」・・・戦いに敗れ、盲目の身となつたかつての勇将景清と、その娘人丸の再会を通して語られる親子の情愛。今のわが身を恥じつつ昔の武勇伝を語つた景清は、死後の回向を娘に託して、永遠の別れをする。観世榮夫が落ちぶれた老残の男の喪失感、孤独感を情感豊かに表現。世俗との絆を断つた景清の内面が描き出される名曲がテーマであつた。

今、能についての歴史、世阿弥の芸術論、世阿弥の幽玄、そして妙について学び始めた。こういった研究ももちろん、実際に舞うことを体験学習できることに非常に喜びを感じる。新劇を主として携わつてきたが、能の世界を勉強し、その表現方法の非リアリズム演劇といふかつて触れたことのない芸術は新鮮である。

日常では見たり聴いたり感じとることのできない世界、そして日常では見たり聴いたりすることのない所作や発生をとまなう演技によって伝えようとし、舞台上に展開される光景を思い浮かべ、それをどのように見ている側に伝え感動させていくのか、600年前の芸術と新劇との調和によって、もっと良い舞台芸術は出来ないものかを探求していきたい。

自己陶醉の中で芝居を演じてきた若い頃であつたが、今は内面から人間性を演じられる(芝居の世界だけでなく、生きて年老いていく過程の中でも)為にその材料となるものを見つけて行くことを幸福と生きがいとしていく。

死者や天国が登場するファンタジー映画作品の中には、『黄泉がえり』『星に願いを』『ワンダフルライフ』米国では『天国から来たチャンピオン』などがある。

2004年の日本映画の代表作は、『天国の本屋～恋火』『世界の中心で、愛をさけぶ』である。この中に出てくるせりふの中にも、登場人物の持っている天国感や文化や宗教からくる死者感、幽玄性に余剰が伺える。

『黄泉がえり』より

シーン 88 平太「おそらくこの未知の存在によるある種のエネルギー活動が私たちの死に別れた人間への思い、想念に反応し、そのエネルギーの及ぶ範囲に残された遺骨等、死者たちの肉体の一部を元に彼らを実体化させたのではないか・・・」

シーン 154 平太「愛する人が消えてなお、彼らは生きることを意味を失わなかった。いやむしろ、黄泉がえりとは実は死者によって、新たに生きる意味を見つけ出した者たちのことではなかったのか」

シーン 156 平太「・・・たとえ一時間でも一分でも一秒でも、自分が本当に愛した人と心が通じ合えたなら、私は自分の人生を幸せだと思える。その思いが私にある限り、私は前を向いて生きていくことができる・・・」

『天国の本屋～恋火』より

シーン 6 ヤマキ「人間の寿命というのはジャスト百歳に設定されておる。しかし誰でも百歳まで生きられる訳じゃない。そこで、残った人生を全うする場所が天国というわけなのだ。つまり、80歳で死んだものは20年、20歳で死んだものは80年、天国で生きることになる。合計百年生きると、天国での記憶はすべて消され、現世に赤ん坊として生まれる」

シーン 14 ヤマキ「(百二歳まで生きたらどうなるかを受けて)簡単なことだよ。そういう場合は天国を素通りして、生まれ変わりの人を同時に現世で生きているのだ。百二歳の人がいれば、その生まれ変わりもあっちで二歳になっているというわけだな。納得いただけたかな」

『世界の中心で、愛をさけぶ』より

シーン 108 アポリジニの兄「俺たちは今、二回目の埋葬に行くところだった・・・ママが死んでね、アポリジニは遺体を二回埋葬するんだ・・・一回目は肉体のため、二回目は骨のためだ」アポリジニ弟「そうだ。死者の身体に宿った血を汗は、すべて大地にしみ込み、地中の神聖な泉へと向かう。それを追って、死者の魂も泉へ向かい、そこで精霊となって暮らすんだよ」

エネルギーについては様々な解釈があるであろう。

自身は日常の生活の中でこのエネルギーを感じる事の多い方だが、時にはそんなことを感じないで過ごしたほうが楽なときもある。常に意識的には無く、無意識のうちに自分の中にあるエネルギーが今、どのような状態であるか信号を送ってくれる。エネルギーをどのように向上させていくかは、マインドコントロールにつきる。自分のエネルギーを他人に喜ばれる場合もあるが、嫌われる場合もある。相手にプラスにはたらくことが多くなるように使うことが必要である。

天国の存在については、十人十色である。

死への恐怖を癒すパラダイスの存在については人様々な考えがあって、どれも否定できないし、すべきではないであろう。大学時代の舞台公演では良く天国へ行くまでに出会う人間模様を描いた作品を上演したものだ。また、能もそうだがドラマチックな映画を作るテーマとしては数限りない発想がここから生まれるから、生きる者と死んだ者との出会い、この世とあの世の世界は様々なジャンルの文化には必須である。オーストラリアのウルル地方の先住民であるアボリジニについては最近良く耳にする。この民族が大切にしている神聖なる場所 = 世界の中心と長澤まさみ演じるアキに言わせているせりふも大変よしい。

国、民族によって異なる人間にとっての幸福、永遠の魂の穏やかな居場所の違いはあるがどれが正解かは答えは無い。

4 . 日本文学と英詩の融合

井上靖の『あすなる物語』 と英詩を融合させてみる。

鮎太と祖母りょうの土蔵生活に、19歳の冴子が同居する事になったのは鮎太が13歳になった春であった。おりょうは先代の玄久の妾で、死後、村の収入役と結託して戸籍を書き換えて後妻という形で梶家に入り込んだ。鮎太の実家の両親は豊橋に住んでおり、そこから二人の生活費が送り届けられていた。冴子はおりょう婆さんの姪である。色が白く眼が大きく澄んで表情は生き生きしている少女 冴子は大学生加島と天城の雪の中で心中する。

冴子と大学生加島との出会い、手紙のやり取り、逢引き、死へ向けての心の変化をイマジネーションして日本文学と英詩を用いてストーリーを創作してみることにする。

冴子「突然のお手紙でびっくりなさってらっしゃるでしょう。いつも遠くからあなた様のことをお慕い申し上げております、おりょうさんの蔵に住まわせていただいている姪の冴

子といひます。一度お目にかかって御話をさせて頂きたく、手紙をしたためました。勉強に忙しいのにお邪魔かと思いますが、どうか1度私の願いを叶えていただきたくお手紙差し上げます。」鮎太に使いを頼んだ最初の手紙である。

冴子「初めての私からのお手紙から2週間もたっております。きっとあなた様は手紙を捨てられてしまわれたのですね。悲しゅうございます。今一度お願い申し上げます。大学生活のこと、あなた様の将来の夢、そして私の夢を御話する機会を是非いただきたく、恥じらいもなくお願いを申し上げます。」これが2度目の手紙である。

冴子「性懲りも無く、三度目のお手紙差し上げます。私の心はあなた様のことで溢れ、生きているのか死んでいるのか判らない人間となってしまいました。19歳の若い命をどうかお救いください。」

3度目の手紙のあとにやっと加島から返事をもらうことができた。

加島「私のような者のために、あなたの大切な命を削ってしまうようなことは悲しいことです。私はイギリス文学を勉強しておりますが、イギリス詩人の多くの詩を知ることによって生きることの美しさ、死ぬことのそれ以上の輝きを教えられました。その学んだことを少しでもあなたに伝えることができ、それで救われたら私の役目としては充分でないかと、今は思っております。あなたの悩みをどうぞ、包み隠さずに手紙にしたためて送ってください。喜んで読ませていただきます。」

冴子「大変幸せでございます。私の悩みを聞いてくださいますのね。どうかお願いします。私は、女学校であらぬ疑いをかけられました。下級生の万年筆と時計を取り上げたという噂でございます。噂の発信元はこの町の郵便局長の娘と山葵屋の娘の二人です。彼女たちは以前から私のことを良く思っていませんで、何かにつけては私を犯人にしたてて下級生の持ち物を取り上げるのでございます。そんな噂話が学校に知れ私は1年の休学にさせられました。乙女の大切なこの1年のブランクを非常に嘆かわしくてしかたがありません。将来の女教師になる夢すらも遠くに行ってしまいました。どうか私のこれから歩む道をお教えください。」

加島「ロバート・ヘリックの詩を知っているかい？是非訳して参考にしてくれたまえ。」

“ To the Virgins, to Make Much of Time ”

Gather ye rose-buds while ye may, Old Time is still a-flying :

And this same flower that smiles today, Tomorrow will be dying.

The glorious Lamp of Heaven, the Sun, The higher he's a-getting
The sooner will his race be run, And nearer he's to setting

That age is best which is first, When youth and blood are warmer:
But being spent, the worse, and worst Times, will succeed the former.

Then be not coy, but use your time; And while ye may, go marry:
For having lost but once your prime, You may for ever tarry.

冴子「時を惜しめと、乙女たちに告げる。まだ間に合ううちに、薔薇のつぼみを摘むがいい。昔から時間は矢のように飛んでゆくものなのだから。ここに咲いているこの花も今日は微笑んでいるが、明日には死に果ててゆくに決まっている。巨大な灯のように大空に輝いている太陽も、高く昇れば昇るほど、それだけ早く旅路を終え、忽ち西に沈んでゆく。一生のうちで若い頃が一番いい、青春の血が生き生きと脈うっているからだ。しかし、それが過ぎると、あとは悪くなる一方だ、そして、やがて最悪の時がやってくる。

だから、はにかむのはやめ、自分の青春を生きぬき、まだ間に合ううちに、お嫁にゆくがいい。いったん花の盛りを逃してしまえば、永久に待ちぼうけをくうだけなのだから。

イギリス国教会の聖職者の抒情詩ね。今がやはり花なのよね。花のある内に死んでしまおうかしら。私のこれからに何があるのでしょうか。」

加島「今度は、ジョン・ダンの詩をあなたに捧げましょう。」

“ Death, be not proud, though some have called thee ”

Death, be not proud, though some have called thee Mighty and dreadful, for thou art not so; For those whom thou think'st thou dost overthrow Die not, poor Death,
nor yet canst thou kill me.

From rest and sleep, which but thy pictures be, Much pleasure then, from thee much more must flow;

And soonest our best men with thee do go, Rest of their bones and soul's delivery.

Thou'rt slave to fate, chance, kings and desperate men, And dost with poison, war, and sickness dwell; And poppy or charms can make us sleep as well, And better than Thy stroke. Why Swell'st thou then?
One short sleep past, we wake eternally, And death shall be more.
Death, thou shalt die.

冴子「お手紙ありがとうございます。今回の詩は随分訳すのにお時間かかりました。

死よ、驕るなかれ、たとえ連中がお前を強大で恐るべき者と呼んだとしても お前はそんな者では全然ない。お前が亡ぼしたとうぬぼれている相手にしても、死んでなんかいない、私だってお前に殺せはしないのだ。お前とよく似た休息を眠りからでも、喜びが溢れ出ている、とすればお前からはもっと多くの喜びが溢れ出るはずだ。敬虔な人たちが喜んでお前を共に旅立つのも当然を話だ、お前が肉体を休めてくれ、魂を解放してくれるからだ。お前は、運命や偶然や王侯や絶望した人間のしがない奴隷、そして毒薬や戦争のしがない同居人にすぎない。眠るだけならけしの実や呪いに頼る手がある、しかも、お前の一撃よりも効目がある。だから威張るのはよすがいい。ほんの束の間の仮睡から覚めれば、永遠の命がやってくる。つまり死はなくなる。死よ、お前は死んでしまったのだ。

心安らく詩ですね。死ぬことの恐怖が取り除かれた思いです。是非一度、あなたに直にお会いして、色々な御話を伺えませんか？明後日、神社の境内の裏でお待ちしてます。」

加島はその日に現われなかった。神社で鮎太に出会って泣いていたのは、何時間待っても現れないことの悲しみの涙であった。」夏休みに鮎太は豊橋に行っていたが、その間に冴子に奇跡が起こる。夏の夕暮れ時に河原を歩いていた冴子が加島に遭遇したのだ。

手紙ではなく、自分の口から冴子は加島に思いを伝えた。手紙では伝わらなかった思いが通じて、加島の方も冴子の情熱に心を奪われていった。加島は鮎太に渡すべく、自筆の「克己」ということばを紙に書いて冴子に渡した。冴子は鮎太の机の窓に飾った。夏が過ぎると加島は大学に戻り、再び2人は離れ離れになってしまう。

一人になると冴子は堪らなく寂しい。遠く離れた加島への思い、死ぬことへの憧れが大きく膨らんで行く。何度となく独り言を言うことが多くなる。

「遠い、遠い山の奥で、深い、深い雪にうずもれて、冷たい、冷たい雪に包まれて眠ってしまうの...いつか。」

10月の秋祭りの後、冴子は実家に帰ってくるという二晩家をあげた。秋の海を見に行っていたのだ。死のうと思ったが死ぬのに季節が邪魔をした。雪の山奥で美しく死のうと思っていた。

「わたし段々、勉強する人が好きになるわ。勉強するひとを誘惑するの面白いから。」
鮎太には、この意味が全く理解できなかったし、ましてやその数ヶ月後に起こる天城心中事件など予測することさえできなかった。

冴子は加島が帰る日峠で待ちぶせしていた。「少しだけ雪の中を一緒に歩きましょう。」二人は真っ白な雪景色の中で、幾度ともなく口にしてきたイギリスの詩について語り合い、最後はウィリアム・シェイクスピアの“Like as the waves make towards, the pebbled shore”を口ずさみながら永遠の命を求めて眠りについた。

「Like as the waves make towards the pebbled shore So do our minutes hasten to their end; Each changing place with that which goes before, In sequent toil all forwards do contend.」

「波が浜辺にさざれ石めがけて打ち寄せるように、人間の命も時々刻々その終わりに向かって急いでゆく。一瞬一瞬がその前の一瞬と交替し、次々に前へ前へと争って進んで行く。」
「トオイトオイヤマノオクデ、フカイフカイユキニウズモレテ、ツメタイツメタイユキニツツマレテネムッテシマウノ...。」

加島は冴子と死ぬことが本望であったかは解らない。

恋する若者の深層の中には歌心があり、独特の青臭い余情がある。日本語の中にも英語の中にもその言葉の行間に余情があり、それが人間の魂を打ち、生きて行くのか死の世界を選ぶのかを選択する。

5．融合文化について

「全人類の共存のための世界の文化の調和と融合」を目指すという「融合文化論」について考察する。

今までは趣味の世界の中で多くの戯曲、映画シナリオを読み親しんできた。

大学のころは多くの新旧映画を安い映画館をはしごして鑑賞し、多くの新劇の舞台を観劇してきた。最近になって、触れたことのない文化に出会いたいという欲求が高まってきた。「国際融合学会第7回国内大会」の基調報告「調和と融合について」の中で、今までと

違った文化を見つけ出すことができた。

「比較」という競争のイメージから世界のあらゆる文化を他のいかなる文化やその一部と結合融合するかもしれない…。かつて実現を見なかった思想、文化的進化の根底に「調和の種子がやどしている…。平和・愛・未来ビジョン…幸せになるために何をしなくてはいけないのか…それを見つけること、その研究がこの学びの場での最大の課題である。

『「競争」から「共生」さらに「協力」「強調」そして「調和」の世界へ進む』『過去にとらわれず未来の世界、人間はどうあるべきか？人間の社会は本来どうあるべきか？』をこれからの人生での究極の課題にしていきたい。

融合文化を学ぶにあたり課題教材、参考文献を与えられた中にもいくつかのヒントがある。

トーマス・インモースの『変わらざる民族』のはしがきにあるプロフィールが良い。故郷のスイス、シュヴィーツを「スイスの大和」だと自慢している。

謝肉祭の仮装行列や太鼓にあわせて道化が踊る豊年踊りという古代ゲルマン文化を四季をとおして住民の生活が忠実であるというコンビネーションが彼の幼い目に面白く写っていた…というはしがきにその後の研究の足がかりを感じさせる。

宣教師として日本へ来て盛岡で6年過ごし、山深い片田舎に残された郷土芸能への、故郷に似ていることの驚き、その後上智大学で依頼された演劇史の講義のために出会ったエーベル博士の「中部スイス演劇史」の中での高山右近の名が「変わらざる民族」の名著を生み出している。

日本を研究する中で、日本の文化の喪失や西洋の精神文化のひろまりなどによる西洋人の日本は西洋化に向かっていると思われていることを否定しむしろ東洋と西洋の特異な共存にあることが魅力的だと称えている。ライシャワーも正当に指摘したように、今日の世界において日本が極めてユニークな文化を持っているのは、多種多様な融合同化させた結果であると述べている。(P22 11行～12行)日本人の行動と感情の素となる価値体系の核心である、恩・義理・人情・わび・さびに相当する外国語が無いことが、日本的現実を分析するには西洋の概念では十分でないと言っている。超近代的技術と古代的パターンとの並存が日本の特徴であるという言葉もまさに的を射ている。スイスを故郷とする、トーマス・インモースが研究した1500年あたりのヨーロッパ演劇史の中での日本をテーマとする作品、1605年から1836年にかけて全ヨーロッパにまたがる160件の日本題材の上演記録をあげることのできることまでの研究には驚かされるし、そこまで興味を深く持つことに対して敬意を表したい。

能に関しては「谷行」について論じている。日本の文化と歴史における山伏の役割についてまで入って研究している。ひとつの研究テーマから枝を広げていく研究法に関しては非常に参考になるし、ここまで徹底して掘り起こさなければ半端であることを実感させられる。

次にJ・レッドフィールドの『聖なる予言』についても統合、融合のヒントが伺える。

写本は紀元前600年前のものであり、人間社会の大改革が20世紀の最後の20年間に始まる。意識のルネッサンスのようなものが起きる。変革は第一の知恵から始まる。何かを追い求める感覚になって、無意識のうちに表面化する。自分が何を求めているか、より深い充足感を与えてくれる体験が何なのか気がつく。それが完全にわかった時、私たちは第一の知恵を獲得する。この地球上の私たちの生活を取り巻いている本来の神秘を考え直そうということ。

より快適な生き残りのスタイルを確立するために働くことが満足感となり生きる目的となり、我々は最初の疑問を忘れてしまった。16世紀のことである。地球上での人生の目的の意味を発覚するために科学的方法を利用して探険家から派遣された・・・そして目に見えないエネルギーを知覚するようになる・・・自分のエネルギーによって他人に影響を与えることができ、エネルギーをめぐる争いが始まる。愛が人々の心に入ってくるのを許す。コントロールドラマ(脅迫者・尋問者・傍観者・被害者)・・・全人生は、自分自身を成長させる道を見つけ出すためのもの、進化のテーマであり今生の探求。西洋では人生は進歩であり、より高いものへの進化である・・・。

東洋では私たちはエゴの世界を捨てなければならないという教えを文化の思想的な相違を統合、融合させることに意義がある。(P226 13行)

意識的に自分を進化させ、偶然の一致と宇宙が人類に与えるすべての答えを常に注意する。一般的に人と関わるときの新しい方法で、どうエネルギーを使えばいいか述べている。

文明が更に進化すると何が起こるか？我々が何処に向かっているかを知ること、高いレベルに達した私たちの知覚と波動がすでに私たちの前にある天国への道を開いてくれる。人類の進化がもたらした善悪、知恵をより良い成長と平和のために、様々な旅をし続けている。一人には一瞬の人生でも宇宙的規模で物事を思考する場合において、永遠の幸が普遍に続く事の願い無しには有りえないであろう。

そして『第十の予言』で、人間の霊的な目覚めと成長について、死後の世界・過去世・死後の世界と地上の私たちとの関係・バースビジョン(私達が生まれるときに持っていた

人生の目的)・世界ビジョン(世界の未来像)を訴えている。

6. まとめ

21世紀の始まりの今、多くの人々が幸福の扉を開ける鍵を発見し、その素晴らしい現実
に目覚めて、それを後世に伝え、自分自身の体験と照らし合わせていくことが未来に向け
て素晴らしい時間を子孫に与えていくことになるであろう。旅や冒険の中で出会う、生き
ることの意味や教訓を通じて、今までの自己を見つめなおし、余情を楽しむ心のゆとりを
持ち、輝かしい調和と融合の未来に向けて一人一人の心の結集が必要なのである。

註

- 1、『ながらえば』 山田太一 新潮文庫 1994年
- 2、『黄泉がえり』 脚本・犬童一心、斉藤ひろし、塩田明彦 監督・塩田明彦
- 3、『星に願いを』 脚本・森らしみ、冬月カオル 監督・富樫森
- 4、『ワンダフルライフ』1999年 脚本、監督・是枝裕和
- 5、『天国から来たチャンピオン』 1978年 共同脚本・ウオーレン・ベイテイ、エレン・メイ
共同監督・ウオーレン・ベイテイ、バックヘンリー
- 6、『天国の本屋～恋火』 脚本・猪飼恭子、篠原哲雄 監督・篠原哲雄
- 7、『世界の中心で、愛をさけぶ』 脚本・坂元裕二、伊藤ちひろ、行定勲 監督・行定勲
- 8、『あすなる物語』 井上靖 新潮文庫 1958年
- 9、『変わらざる民族』 トマス・インモス 南総社 1972年
- 10、『聖なる予言』 J・レッドフィールド(山川紘矢・亜希子訳) 角川文庫 1979年
- 11、『第十の予言』 J・レッドフィールド(山川紘矢・亜希子訳) 角川文庫 1996年

参考文献

- 『現代の小説101篇の読み方』 國文學第37巻11号改定版 學燈社 1993年
『イギリス名詩選』 平井正穂 編 岩波書店 1990年